

と、学校長から依頼された。ソ連の課長以下十四、五人の中の日本人五人中の一人だった。仕事は露語の下に日本漢字を書き並べることであった。泊居、大策、名寄、久春内の各地を廻り歩いて全部終了に二か月ほどかかった。

二十二年五月二十日頃引揚命令が出て、函館上陸は六月三日であった。以来私は岩見沢で教員生活も終わり、住居も構えて、年金生活で現在に至っている。

追記

その頃旧樺太の国境古屯、気屯等での烈しかった戦争での日本兵の遺骨収容の新聞記事を読んで痛哭の思いがこみあげてくるのである。再々度「樺太一九四五年夏」という本を読んでいるが、中に小学校で受持った事のある児童名が出て来るのがあつたりして涙にくれることがある。

泊居高女の最後の卒業生（二十二年）も皆が還暦を迎えたようだ。全国に散り々になっている卒業生が北海道方面と東京方面で同窓会、クラス会が毎年のように開催されている。北海道では今年二十五回目だった。私も出

来るだけ出席することになっている。

終戦と私

北海道 橋本 幸彦

終戦直前

太平洋戦争がたけなわを過ぎ、日本が敗色に傾いて国中の老若男女は何らかの形で戦争にかかわっていた当時、私は三菱の傍系である南樺太炭鉱鉄道北小沢炭鉱（炭鉱長 片岡良太郎氏）に勤務しておりました。

樺太の炭鉱は殆どが保坑、又は休止となり、九州と北海道の炭鉱にその従業員の大部分が徴用転換させられたのでした。

私は北小沢炭鉱の残留要員として、管理業務と留守家族を守るため樺太に残りました。

終戦とその直後

昭和二十年八月十五日、終戦の玉音（ラジオ）は防空壕の中で聞き涙を流し残念がったものでした。終戦直後

は無秩序な状態が続き、配給所を荒らす者、本州に向けて逃げようとする者、自殺行為をする者、等々色々なケースがありました。私は当時隣組長をしておりまして、みんなを集めこれからのことを相談したところ、異論もありましたが、できるだけ南下して北海道に渡りたいとの結論に達し、馬車一台に衣類、食糧を積み、いざと言うときのことを考えて、手榴弾若干に青酸カリを病院から調達して隣組員各々全員（約四十人位）で、北小沢を出発し諸津まで十六キロのところを老人、子供がおりましてので五時間くらいかかって南下しました。

しかし諸津には既にソ連兵が上陸しており、別段無抵抗の日本人には危害を加えている様子もなく一安心はしたものの、行く先々どこに行っても既にソ連兵がいるのであれば、北小沢から諸津まで南下した時の苦労を考えると、とても北海道まで渡ることが至難であろうとの判断から全員で相談の結果、又北小沢に引返すこととしました。

みんなが南下して北海道に渡りたいという心底にはソ連兵がくると日本人にどんな危害を加えるか計り知れない。

かったからですが、諸津ではその心配も薄らいだので、一応北小沢に戻り自宅の様子を見ることとしたわけです。

ソ連炭鉱の開始

その後間もなく北小沢にもソ連人がやってきました。最初は軍人でしたが比較のおだやかな軍人で、今までの心配は更にうすれました。

然し北小沢にソ連人が来たというのを聞いて一部の人は家を焼き自殺した方、又は一家全員鉄砲自殺した方もおりました。

逐次ソ連人が増え、ソ連管理下での炭鉱が開始されることとなりました。

いつ日本に引揚げられるか不明のままでは、いたしかたもなく、我々は気持を一にしてソ連の炭鉱経営に力を貸すこととしたわけです。当初は炭鉱長、技師長、事務長、採鉱区長、会計課長等の最高幹部はソ連人が占め、その補佐的役割である技師長代理、起業課長、査定課長、企画課長（小生）人事管理者等を日本人が受持つてスタートしました。

ソ連の炭鉱は国宮のため、日本の炭鉱経営とは大きく異なり、意見の相違等から、それぞれの立場で口論になることが多く、日本の従業員をかばうことも含め随分と苦勞させられ、そんな状態が二年くらい続いた次第です。

引揚開始

昭和二十二年六月二十五日第一回の引揚命令があり、北小沢からは主人が日本に徴用転換した留守家族三十八家族百四十二人と幹部級六家族三十二人の合計百七十四人でした。私も含まれておりましたので、早速後任のソ連人に仕事の引継ぎと、身の廻りの整理を急いで行い、名好の人等と一緒に北小沢から貨物船(石炭船)に乗り、住みなれた土地を離れることになりました。

船の中は雑踏する人々ですべてが大変でしたが、特に臨時の便所が船べりから海に突出し困りも形ばかりで、みんなが行列をつくって用をたしていた情景が今だに嫌な思い出として残っております。

眞岡收容所

七月二十六日眞岡收容所に着きますと、ここも日本に

引揚げる人達でものすごい混雑ぶりでした。收容所は畳一帖に二人くらいの割合で寝泊まりさせられました。短い人で三、四日、長い人では一か月も滞在した様です。

満足に睡眠もとれず、特に仕事もなく、あちらこちらで今では考えられませんがシラミつぶしをしていた光景がありました。六月三十日、眞岡港を雲仙丸に乗って出発日本に向かいました。

函館港上陸

翌々日の七月二日夢にまで見た日本に到着しましたが、早速の上陸にはならず七月八日まで待つて下船し日本本土を踏みました。

荷物の検閲と身体中にDDTを散布される等、その乱暴な取扱いに驚きながら、私は三菱の出先機関で、函館に上陸と同時に職員、労務省を問わず全員解雇という措置をうけ一時金六百円をもらって親戚に身を寄せるため、汽車に乗りました。函館で配給された白米のオニギリを車中で食べましたが、そのときの美味しかったことは未だに忘れることができません。

その後しばらく休養して雄別炭鉱に勤務することとな

りましたが、それが私の日本に引揚げてからの第一の働き場所であり、其後二十年間炭鉱生活を送った縁となつた次第です。

後書

終戦後すでに四十五年を経過し、一緒に引揚げ元気であつた母も既に亡く、世は昭和から平成へと移り変わつて引揚げのとき三十歳の私もすっかり老年者となりました。今は子供、孫と一緒に平和に暮らしておりますが、この平和が永く続いて、二度と子供や孫達に私達のような戦争の苦しみを味わせたくないものです。

又日本に引揚げることもできず樺太で亡くなり、現在の平和を味わうこともできなかった先輩、同僚には心から冥福を祈つてやみません。

磯舟に乗って逃げ帰つた

北海道 満月 敏

昭和二十年八月十五日、戦争は終結した。弥満小学校

長の連絡で終戦を知つた。佐瀬校長は、職員各戸を走り廻つた。一同は驚き、市街地中央の十字路口面に車座になり、知床村の方針、日本国の今後の政策に、樺太庁に電話で問い合わせも返信なし。大泊町からも通達なし。村民はうろたえるのみでした。

十六日、知床村は樺太を引き揚げると発表があり、各戸に戸籍謄本と非常用に米二斗、砂糖の配給がありました。荷物は三個と限定されましたが、家の中の物、三個となれば、あれかこれかと出来上がらず、夕方になって大きき一尺五寸立方と変わり、手持米イリ米にと、指示が出た。毎時変わる、班内連絡や、荷造りで役場行き。

十七日は連絡船の割当が知床村にはなく、十八日、女・子供は朝七時にバス停に集合。先を争う人ばかりで、役場職員は日本刀で乗車整理。青年学校職員家族と妻と子供、姪の四人は一番車に乗れたが、男子は自家用の馬車で、私はリヤカーに三個の荷物を持って、大泊港に向かったが、長浜でパンクし、修理出来ずそのまま大泊船見町に、午後十時過ぎ頃到着した。

集合地、小林綿屋で皆が待つており全員集合できた。